

■自己点検・評価書

	頁	行	誤	正
1	18	↑2	2年次に「化学系実習（分子機能）」	2年次に「化学系実習（ <u>有機化学</u> ）」
2	34	↑5	<u>5</u> 年次前期の「臨床薬物動態学」では、薬物動態学理論に基づき、臨床現場で活用できる薬物投与設計に関する知識や技能の醸成を行っている（資料 5-3、p. <u>267</u> ）。	<u>6</u> 年次前期の「臨床薬物動態学」では、薬物動態学理論に基づき、臨床現場で活用できる薬物投与設計に関する知識や技能の醸成を行っている（資料 5-3、p. <u>264</u> ）。
3	35	4	「臨床前実習 <u>I、II</u> 」	「臨床前実習 <u>II</u> 」
4	36	5	<u>41.78</u> 単位 (<u>24.58%</u>) に相当する部分が、	<u>40.58</u> 単位 (<u>23.87%</u>) に相当する部分が、
5	39	↑8	<u>合計 115 コマ</u> で	<u>116 コマ</u> および総合演習 2 コマの合計 <u>118 コマ</u> で
6	40	3	これらの科目を合計すると <u>145</u> コマの十分な時間数が確保されている	これらの科目を合計すると <u>148</u> コマの十分な時間数が確保されている
7	40	20	実務実習事前学習（「 <u>保険薬局薬学</u> 」、「 <u>病院薬学</u> 」、「 <u>臨床前実習 I、II</u> 」）の教育は、	実務実習事前学習（「 <u>保険薬局学</u> 」、「 <u>病院薬学</u> 」、「 <u>臨床前実習 I、II</u> 」）の教育は、
8	61	5	上位 <u>5</u> 名を表彰する	上位 <u>6</u> 名を表彰する
9	77	20	<u>学生支援センター</u> では、学生の留年、在籍等に関する相談を随時受け付け、	<u>学生相談室</u> では、学生の留年、在籍等に関する相談を随時受け付け、
10	77	22	このように学生の <u>在席</u> 状況を随時把握し、	このように学生の <u>在籍</u> 状況を随時把握し、
11	84	21	<u>4年次以降</u> は学生の配属研究室の教員が、	<u>3年次 12 月の研究室仮配属以降</u> は学生の配属研究室の教員が、
12	96	10	薬学部（薬学科と創薬科学科）の専任教員の年齢構成の数と比率は、60 歳代 <u>3 名</u> (<u>5.6%</u>)、50 歳代 <u>13 名</u> (<u>24.0%</u>)、40 歳代 <u>25 名</u> (<u>46.3%</u>)、30 歳代 <u>10 名</u> (<u>18.5%</u>)、20 歳代 <u>3 名</u> (<u>5.6%</u>) であり、ほぼ正規分布で適切な構成となっている（基礎資料 10）。 <u>なお、薬学科専任教員のみとし</u>	薬学部（薬学科）の専任教員の年齢構成の数と比率は、60 歳代 <u>3 名</u> (<u>7.9%</u>)、50 歳代 <u>9 名</u> (<u>23.7%</u>)、40 歳代 <u>17 名</u> (<u>44.7%</u>)、30 歳代 <u>8 名</u> (<u>21.1%</u>)、20 歳代 <u>1 名</u> (<u>2.6%</u>) であり、ほぼ正規分布で適切な構成となっている（基礎資料 10）。

			<u>た場合も、基礎資料9に記載のとおり、ほぼ同等の分布構成である。</u>	
13	99	17	薬学部の教員の授業担当時間数は、	薬学部薬学科の教員の授業担当時間数は、
14	99	19	年間担当時間数の週平均は <u>3.9</u> 時間である。	年間担当時間数の週平均は <u>4.1</u> 時間である。
15	119	↑10	薬学科専門教育におけるアドバンス教育の占める割合は <u>24.58%</u> まで改善され（資料 49）、	薬学科専門教育におけるアドバンス教育の占める割合は <u>23.87%</u> まで改善され（資料 49）、

■基礎資料

	資料 番号	頁	箇所	誤	正
1	15	241	Ⅲ 学会および社会における主な活動	<u>該当なし</u>	<u>The Journal of Biochemistry</u> 論文審査員、 <u>日本生化学会</u> 会員